小田原男声合唱団 10 定期演奏会

1971 ODG

ODAWARA DANSEI 10th REGULAR CONCERT

1981. 7. 11

小田原男声合唱団 第10回定期演奏会

1981年７月11日㈯　６:30ＰＭ　小田原市民会館大ホール

第10回定期演奏会あいさつ

団長　下村　興毅

福永先生を常任指揮者に迎え、小田原男声が練習第一声をあげたのは昭和46年11月。先生を前に神妙な顔をしてまじめに、そして懸命に歌っていた結団当初の練習は、今にして思えばほほえましいものでした。結成半年で第一回定期演奏会を開き、１年目でコンクールに初出場し、全国大会まで出場という成果をおさめた小田原男声を、当時の新聞は次のように紹介しています。

「花開いた男の根性、沈滞気味の合唱界にカツ。ヤル気いっぱいの男たち、結成一年で全国大会へ。誕生一年にしてこの躍進は、何かをやりたくてムズムズしている男たちへの大きな刺激になるに違いない。」

そして、10年たちました。最近、先生に「小田原男声も10年目にしてようやく合唱団らしくなった。10年間いろいろ活動し、経験を積んできたけれど、ここに来て本来の合唱をする姿が出来てきました。これまで作って来た貯えを生かして、これから自分達の合唱をするんだという気持ちでやっていける時期になりましたね。」と言われました。

今年３月、演奏会を行った日本男声合唱協会の加盟４団体がそれぞれ20～50年の歴史を持つことを考えれば、小田原合唱もやっと一人立ちして、これから地道に、着実に歩みを刻んでいけるわけです。今年は「うまいコーラスより、いいコーラスを」スローガンに心のこもったステージ作りをめざしていきたいと願っています。合唱を心から好きで、合唱していれば満足な集団がその活動範囲を拡げようとするとき、自分の団体を考えるだけでなく、その活動が広い意味での文化向上の一助となると考えたいものです。

小田原男声は今後とも、皆さんと手を携えて歩んでまいります。よろしくご指導下さい。

本日のご来場、団員一同心から感謝いたします。ありがとうございました。

第10回定演にあたって

福永　陽一郎

今年（1981年）小田原男声合唱団は、気分の晴れ晴れした万々歳の年開けを迎えたわけではなかった。副指揮者の大塚先生、技術委員長の柏木先生は、身体を悪くされて休まれることが多く、トップ・テノールのパート・リーダーの吉田さんは家業のため、セカンド・テノールのリーダーの福井（靖）先生は骨折のため、これまたしばらく欠席。テノールのソリストの長谷川さんは、神奈川県連や湘南合唱連盟の役職で多忙をきわめ、やはりトップ・テノールの実力者で合唱団の事業部長だった福井隆さんは転勤。団長で発声面の指導者であった松本先生は、ずいぶんがん張って下さったが、内実は、公務の中学校は、異常な状況下にあって、合唱団どころではなかったのである。こうした主として技術陣の総崩れの中で、合唱団は、青息吐息のその日暮しの中で秋を過し、創立十周年というのに、むしろ危機感いっぱいで新年を迎えたのであった。

２月１日、横須賀市で、神奈川県の代表合唱団のひとつとして単独ステージを持ったとき、トップ・テノールのメンバー構成は、顔ぶれから言えば、過去の小田原男声のこのパートの中核と主力をすっかり欠いたと見受けられる状態であった。いままで一列目に並んでいた顔を全部欠いていたのである。そして、そしてである。そうした、失礼ながら、いわば二軍的編成で、そのトップ・テノールは、男声合唱の最重要パートであることの責任を全うしたのである。私は、正直のところ、本心から危ぶんでいたので、予想外の好結果に真底ホッとした。そして、これでこそ、小田原男声10年目の姿だと思った。

合唱団創設の言い出しっぺ。10年、指揮者だった私を別にすれば、たゞ一人ひとつの役職・事務局長を続けてきた井上さんのこの10年間は、40歳から50歳への10年間であったはずだ。ほかにも似たような年齢の方が何人もいらっしゃるが、いうなれば〝不惑の年〟からの10年。本当は惑わずどころか、まったく予想もしなかった試行錯誤と高揚と落胆の10年間ではなかったか。いくらか年上の私にとっても、そして多くの、団と共に歩んだ人々にとっても、この10年間に経てきた道程は、必ずや起伏の大きいものであったに違いない。小田原男声は、それだけのそれぞれの人間の集合体だったし、そのやってきたことは、ひとつの合唱団として、決して凡々たる年月ではなかったのだ。記録を見ればわかるとおり、毎年の定期演奏会のほかに、何度とない「第九」、「ヴュルディのレクィユム」「メサイア」「アルト・ラプソディ」それに「マーラーの千人の交響曲」まである。何ごとか、軋みのないほうがおかしい。

そのあげくの10周年である。私は、いまこそ小田原男声合唱団では、何があってもゆるがない合唱団が確立されたと考える。今年、スタッフの大半は、革新的と言ってよい顔ぶれに変った。いままでは、何かと追随する側にいた人々が、嬉々として先頭に立っている姿を見るのは、本当に心楽しい。

初心に帰れ、とよく言う。初心に帰って物事を為せと言う。初心に帰るとは、10年前の状態に戻ることではあるまい。10年目の今年を出発点にせよ。ということではないか。10周年定期演奏会。小田原男声合唱団は、本日をもって再び出発する。旅立ちをする。そのように決意している私である。

■常任指揮者　**福永陽一郎**

東京音楽学校（現東京芸術大学）本科ピアノ科出身。1956年より藤原歌劇団常任指揮者として活躍、同団の第３次渡米公演を指揮した。またイタリアオペラ来日公演の折には副指揮者として参加、歌劇指揮者として広くその名を知られた。合唱界においても、プロ合唱団・東京コラリアーズの創立を忘れることはできない。また、アマチュア音楽の育成にかける情熱は比類なく小田原男声のほか、法政、早稲田、同志社等の大学合唱団、湘南コールグリューン、藤沢市民交響楽団の常任指揮者をつとめ、昨年の藤沢市民オペラ「カルメン」の上演は多大の反響を呼んだ。評論、編曲、レコード録音の分野における業績もきわめて大きなものがある。

■伴奏者　**久邇之宣**

昭和47年国立音楽大学ピアノ科卒業クロイツァー豊子に師事。二期会研究生。東京室内歌劇場などでピアニストをつとめる。フェリス女学院音楽大学講師。伴奏ピアニストとして活躍。小田原男声合唱団の第26回全日本合唱コンクール全国大会（岡山）で銅賞受賞の栄誉を受けたのも彼の伴奏の功績に負うところが大きい。小田原男声合唱団では、過去５回定期演奏合で高い評評価を得ている。２年間ウィーン留学６月30日帰国したばかりの演奏会である。

プログラム

Ⅰ　ロバート・ショウ編曲による「小学唱歌」

1．ローレライ	ジルヒャー作曲	近藤朔風訳詞
2．春の日の花と輝く	アイルランド民謡	堀内敬三訳詞
3．埴生の宿	ビショップ作曲	里見　義訳詞
4．螢の光	スコットランド民謡	作詩者不詳
5．故郷の空	スコットランド民謡	大和田建樹作詞
6．まことの愛	ドイツ民謡	

Ⅱ　さすらう若人の歌

G.Mahler　作曲
福永陽一郎　編曲

1．君がとつぐ日
2．露しげき朝の野辺に
3．灼熱せる短刀もて
4．君が青きひとみ

Ⅲ　男声合唱組曲「雪明りの路」

伊藤　整　作詩
多田武彦　作曲

1．春を待つ
2．梅ちゃん
3．月夜を歩く
4．白い障子
5．夜まわり
6．雪夜

Ⅳ　サン・サーンス男声合唱曲集

C.Saint-Saëns　作曲
安田二郎　訳詞

秋の歌
冬のセレナード
春の讃歌

曲目解説

福永陽一郎

ロバート・ショウ編曲による「小学唱歌」

「唱歌」という言葉は、たとえば「小学唱歌」というとき、私たちの間でひとつの種類の歌曲と意味する名詞であって、多少とも専門的な人間からは「童謡」とはっきり対立したものと考えられている曲種である。

大正生れの者にとっては、唱歌の代表は「尋常小学唱歌」の中にあったものである。「春の小川」とか「故郷」とか「朧月夜」とか「冬景色」、さらに「われは海の子」や「冬の夜」など、多くの人の愛唱歌になり、大人になっても強い郷愁を呼ぶ。

「唱歌」という言葉は、本来むしろ動詞であって、英語でいうsingingである。明治の初め、音楽（洋楽）教育が日本に導入された時の教師であったアメリカ人・ルーサー・ホワイティング・メーソンが教科書として持ってき自著がFirst Music Reader for the use of Singing in a course of youngest pupilsといったものであって、これを原本にして編成された小学校用の教科書の題名を「小学唱歌読本」と翻訳した。メーソンの原著にはwith choice rote songs とあり、唱歌読本ではなじまないので、「小学唱歌集」とした。その中の歌曲を「小学唱歌」と呼ぶようになった。

メーソンの教本には、アメリカの（つまりそのルーツであるイギリスの）小学校でうたわれていた曲がそのまま持ち込まれており、その代表が「螢の光」や「故郷の空」である。スコットランドやアイルランドの五音音階によるメロディーが、似たような五音音階を持つ日本人になじみやすいと感じられたからであろう。明治のはじめには、雅楽調の歌や箏歌、わらべ唄風の曲も取り入れられていたが、明治中期に姿を消してしまった。この風潮が、以後何十年にわたって、日本の音楽教育をあやまらせる元凶となった。また、明治時代、正式な日本語は文語体であって、口語体は俗語と呼ばれていたから、作詞、訳詞共に難解に流れ、アクセントは無視され、ただ単にシラブルを合わせただけのつけかたをしたから、文章としては立派でも、うたわれると、まるで意味の通じないものも多かった。

さて、このように初頭の教師がアメリカ人であったため、アメリカの愛唱曲と日本の愛唱曲が共通であるという現象がおこった。アメリカ代表的な合唱指導者、ロバート・ショウが、〝バーバーショップ・スタイルをもととして、男声合唱のためにアメリカ民衆の愛唱曲のあれこれを編曲したとき、結果として、その曲目に、日本の小学唱歌あるいはそれに類する唱歌風のうたが多く編入されたのである。本日は、そのロバート・ショウの編曲を使用し多少の無理は承知で、われわれになつかしい歌詞を付してうたうことにした。

「さすらう若人の歌」

いま、全世界的に評価の高まっているグスタフ・マーラーの作品のうち、「さすらう若人の歌は、彼のごく初期に書いたものであり、青春の絶望をうたった傑作として有名な歌曲集である。マーラーという人は〝絶望の音楽家〟と呼ばれ、晩年には世紀末的な人生そのものへの絶望にまで進んでいった人だが、若書きのこの曲では、まだ、初恋に破れて絶望し人をうらみ、やがてようやく立ち直るという、若き日の甘さのこもった痛みの表現となっている。

芸術的な香りの高い歌曲で、大学生くらいの年齢の青年たちが共感をもってうたうことができるもの。男声合唱用の新編曲でアイデアをねっていた私が、絶好のものとして思いついたのがこの「たすらう若人の歌」で、このことを思いついた時に、これは歌曲の編曲ものとして、私のつくるもののうち、もっとも重要なものになるだろうという予感があったほど、望みどおりの楽曲であった。（うまく演奏できた場合、うたった大学生諸君は涙を禁じ得ないという。共感の大きさのためであろう。）

〈さすらう若人の歌〉は本来管弦楽の伴奏付の歌曲であるが、この曲に限らず、マーラーには声楽・器楽の融合された音楽全域にわたる作品が多く、その交響曲でさえ〝声楽的交響曲〟と呼ばれるほど終始一貫して声楽的要素を内蔵している。　これはマーラーが若い頃から文学を愛好し、その方面の豊かな教養を身につけていたことに因るのかもしれないし、幼児に覚え込んだ２００曲に及ぶ民謡のせいかもしれない。そのロマンティーク精神は詩と音楽との境界を外して両者を自由に交流させたのであった。また歌曲に管弦楽の伴奏を用いたことは、多年の指揮経験から学び得た色彩感が生かされた多彩で豊かな描写的効果をあげている。

シューベルトの〈冬の旅〉、シューマンの〈詩人の恋〉同様、失恋の痛手を負った若者の姿を歌う、郷愁に満ちた組曲である。

小鳥のさえずりを思わせる短い前奏に導かれて歌い出される**第１曲**。最愛の人が幸せそうに嫁いで行ってしまう悲しみは、中間部に挿入された素朴な民謡調のメロディーによって一層深いものとなる。「緑の野辺でこの世の楽しさを謳歌する小鳥たち。鳥よ歌うな！花よ咲くな！春はもはや過ぎ去ったのだ」再び現れる主題はさらに陰鬱な響きを帯びてくる。

さわやかな朝の散歩。軽い足取りで**第２曲**は始まる。露の残っている草の葉、小鳥たちのおしゃべり、風鈴草のあいさつ、そしてすべてのものに降り注ぐ朝の光は、若者の心に微かな希望を抱かせた。外に向けられていた眼が自分の心に向かい始めると、音楽もそれにつれてテンポを緩める。「ひょっとしたら自分にも幸福が訪れてくれるだろうか……否！否！そんなことは決してあるはずがないさ」美しい一日の始まりも、傷ついた若者にとってはやはり虚ろであった。

怒りと悲しみの交錯。**第３曲**は苦悩に掻き捲られる若者の心の底からの叫びである。「胸に突き刺った灼熱の剣に、私の心は安まるときがない。昼となく夜となく悶え苦しむばかりだ。空の碧さは彼女の瞳。風になびく黄色い穂は彼女の金髪。何を見ても何を聞いてもあの人のことが思い出されてならない」ある時は激しく、ある時は沈んで〝o weh！（ああ苦しい）〟がしきりに繰返され効果をあげている。そして耐え難い思いに永遠の眠りを願う下降旋律が現われ、極めて印象的な後奏で終わる。

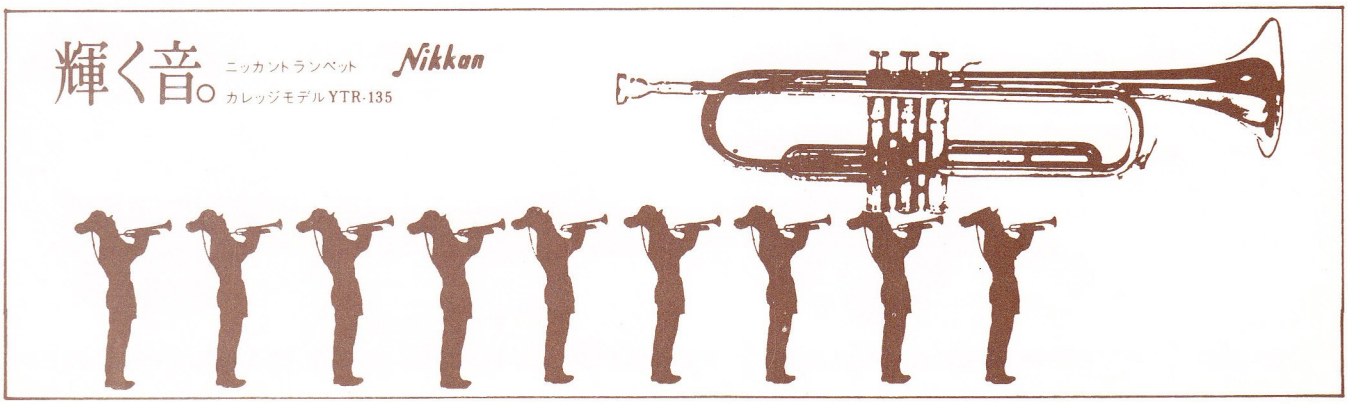
最愛の人に去られ、最愛の土地にいたたまれなくなった若者は重苦しい心で旅に出る。行進曲風の**終曲**。疲れきった若者は路傍にそびえる菩提樹の下で夢を見た。曲はまるで一条の光が差し込むように短調から長調へなだらかに移行し、浄化され純化される若者の心を歌う。「私はあの忌わしい過去を忘れ、愛も悩みも、この世も夢も、すべてが再びすばらしいものとなった」この後半に現れる音楽は諦観の情に満ちて実に感動的である。

男声合唱組曲「雪明りの路」

1959年８月に作曲され、翌60年１月、関西学院グリークラブによって初演された。昭和期の日本を代表する、大文学者の一人である伊藤整の詩は、彼の業績の全体から見れば、量は決して多くない。「雪明りの路」は、伊藤整が、郷里の北海道・小樽近郊に背景を求めて書いた初期の詩を集め、『雪明りをよく知り、永久にそこをたどるあの人々』に捧げた詩集である。もともとは、むしろ歌曲になりにくい自由詩形式で書かれているものを、　見事にきちっとした音楽の形式に構成しなおしているところなど、多田武彦の作曲家としてのすぐれた技巧が如実にあらわれた名作であり、初演以来、全国で愛唱され続けている。この曲の演奏を、東京で聴いた伊藤整は『自由詩が歌曲になるということは、例が無いわけではないが、自分の詩は、そのなかでもとうてい歌曲にはなりがたいものと考えていたのに、見事に音楽に結びついているので、信じがたいと思うほど驚歎した」と言って、非常に喜んだという。

第１曲「春を待つ」まだ雪の残る冬の北海道で、ある晴れた日、陽光のぬくもりが、ようやく近づく春へのあこがれを呼びさます。語りのような淡々とした動きをやわらかいハーモニーに乗せた佳品。

第２曲「梅ちゃん」幼な友達の梅ちゃんの家が火事で丸焼けになったのは



詩人の子供の日にはじめて知った人生の悲しさであった。しあわせうすい女の子に寄せたあわい想いも、つまりは悲しい夢のひとこまであった。

第３曲「月夜を歩く」別に何の目的があるのでもなく、月夜の道を歩いてゆく若い日の感傷を、北国の情景の中にうたったもので、二十歳前後の、大学の合唱団員が、おさえがたいノスタルジーで愛好し愛唱する、単独でもプログラムにのることのある名曲。

第４曲「白い障子」組曲の中での間奏曲の役目をはたしている小品。こうした早いテンポの合唱曲を書くことについて、多田武彦の才能は、他の追従を許さない。

第５曲「夜まわり」北国の冬の夜ふけの凍てつくような光景の中を、無気味な雰囲気を身につけたじいさんが、夜まわり夜まわりと告げながら歩いてゆく。

第６曲「雪夜」はげしい吹雪が止んだあとに、家のそとには〝雪明り〟がほんのり青白く、案外、明るい。多田武彦の組曲の終曲は、どれも抗しがたい魅力で聴き手をひきつけるが、この曲はその中でも特に光ったでき映えである。

伊藤　整氏よりの手紙

お手紙を拝見しました。「雪明りの路」は、私の二十歳前の詩を集めたものですが、口語形式の散文で、韻律を重視したものではありません。ですから作曲されることなどこれまでほとんど考えてゐませんでした。それが、近年になって作曲される機会が少しづつあり、それは詩と云ふものの考へ方や歌謡の考へ方が変ったせいだと思ひます。

先頃多田武彦氏からの手紙で「雨の来る前」が氏の手で作曲され、「朝日新聞」の全日本合唱コンクール課題曲に入選した事を知りました。なほ関西学院グリークラブの東京リサイタルで、同じ多田さんの作曲になる他の六篇が発表されると云ふのは、私にとっては意外なほどのことです。あのやうな静かな感情を歌った詩が音楽として人に受け容れられるには、作曲がどのやうにされるかと云ふことに重点がありませう。私はそれを聞いて見たいと思ってゐます。

もし私のあのやうな詩が音楽と協力できるものならば、私は詩と云ふものを、これ迄と違ったものとして考へることができるのではないか、と思ひます。大正初期に七五調、五七調などの定形律を詩が棄てて以来、日本の詩人たちは、ほとんど音楽との結びつきを放棄して来たのですから、問題は自由な詩形と音楽との関係と云ふことで起るのです。

これを考へるきっかけを今度の発表会で与へられるかも知れないと云ふのが今の私の感想です。（昭和35年６月18日付――和35年７月８日共立講堂に於る関西学院グリークラブ東京リサイタルプログラムより転載）

組曲「雪明りの路」を書いて……多田武彦

去年、私が関学グリークラブの依頼で組曲「中勘助の詩から」を書いた時、その動機の一つとして関学グリークラブの数少い短所を補うべく…ということを云った。具体的に云うと、それは撓まぬ練習、安定したハーモニー、見事なアンサンブル等の数多い長所の裏側で若干放置され勝ちな「抒情的表現」ということであった。実際には周知の通り、組曲「中勘助の詩から」に於る関学グリーの演奏は方々で絶賛を博して居たし、私自身もこれ程円熟した演奏を今まできいたことはない程であったが、詩や曲の要求する抒情性には今一歩というところが足りなかった。

関学グリーのファンである私は依頼を受けて今年も組曲を完成したが、やはり、いや、前組曲以上に強い抒情性と色彩美を要求する組曲を書いて了った。こうした組曲を毎年手掛けられることによって、関学グリーの演奏の上に新しい発展的一面と伝統が生れてくれれば、これ程嬉しいことはない。

（昭和35年１月22・23日、関西学院グリークラブ第28回リサイタルに於る初演時のプログラムより転載）

Saint-Saens の男声合唱曲

19世紀フランスの作曲家、カミーユ・サン・サーンスは、多作家で、交響曲、管弦楽曲、協奏曲、室内楽曲、独奏曲、オペラ、歌曲、宗教曲などのすべてにわたって作品を残し、どれもが性格として大衆性にあふれているため人々に親しまれ愛され、人口に膾炙している点では、フランスのどの近代作曲家にも勝る存在である。

無伴奏男声合唱のための作品は、かなりの数が残されており、いずれも、当時、パリを中心に隆盛した男声合唱運動・オルフェオンのために書かれたものと思われる。

今回とり上げられた３曲は、「秋・冬・春」とシーズンを追っているが、意識された組曲ではなく、内容的にも音楽的にも互に共通性はない。そしてサン・サーンスの音楽上の思想にもよるところだろうが、随所に気の利いたフレーズが点在するにもかかわらず、全体は穏健なアカデミズムを逸脱することが無い作曲様式と同様、歌詞の内容も、ごく当り前の季節随筆を越えることはない。（「秋の歌」に、ややパトリオリズムの色がにじんでいる）サン・サーンスの目標は、人々を快適な気分に誘うことであり、それ以上ではなかったようである。

「秋の歌」

楢の木の葉　色付き　北風　身に凍みて
灰色に　空は暗く　枯れ葉　舞い落ちる頃
冬は近し　いざ備えよ
葡萄は　実り多く　楽しき冬　約束する
帰り急ぐ蜂　羽音高く　忙しげに飛ぶ
高く空に上がる雲雀　騒がしくうたい
去りゆく夏の日々を　惜しむ
乙女を　何故に嘆く　秋の風に吹かれ
季節の移ろいゆくは　人の世の運命
いま去りゆく人も　また帰る　春の日に
熱く燃える　愛の炎
いざ　強く愛せよ　熱き接吻もて
　彼と結ばれよ　結ばれよ彼と
いざ　勇ましき人　此処に立ちて
祖国の為め　生命を捧げよ
いざ起て　若者よ　護れ　祖国を
栄光ある祖国を
輝かしき歴史を護れ
忌まわしくも　仇なす敵は
我等の輝やく栄光を　傷付ける事を
　たゞ只管　念願う
希望を捨てるな
掲げよ　その胸に　固き　その誓い
明日こそは　輝く希望
栄光あれ　我がフランス！
希望を捨てるな

「冬のセレナーデ」

ラララ　ラ
今宵　君を称え　我等　声　合わせ
この優しい歌　君の窓辺　近く
恋しさ溢れる　心の想いを
いま　君に　捧げむ
あゝ　君よ　応答へてよ
熱き　この想い　高鳴る　この胸
応えて開けよ　窓　開き　答えよ
聞かずや　この歌　優しき　この歌
吹き荒ぶ風にも　我が想い　消えず
君に捧げし想い　いや勝り来る
空に囀る鳥　風に薫る花
爽やかな歌は　春を　此処に誘う
知らずや　この想い
聞かずや　この歌
誰とも　明かず　恋の歌　捧げる
愛しさ　溢れる　恋の歌　君に捧ぐ
応えよ　わが歌に
優しさ溢れる　恋の歌　君に捧ぐ
応えよ　わが歌に
優しき歌もて　囁く愛をば　聞きてよ
君こそ　わが花よ
熱きこの想い　捧ぐるを
聞かずや　この想い　変らぬこの愛を
その愛の歌を　君を　称え　うたう
ラララ　ラ

「春の讃歌」

輝やく愛の季節　目覚める春は
いま　夢に溢れ　花咲く
春は　輝く　愛の季節
幸福に溢れる　春
目覚める鳥は　冬に別れを告げ　うたう
輝く太陽の光に　総ては　目を覚ます
冬は　過ぎて　草は　丘を　緑に掩う
芽吹く　木々の小枝に
今ぞ　春は　宿る
春は　希望　溢れ
生命も　甦るよ
吹き零れる　白い花
鳥の　歌も　楽し
溢れる楽しさも　輝く　野辺の光
恵みの夏のたぬ　用意する　大地よ
愛と光の春　この世に満ちて
歓喜の歌は　高く　響くよ
この世の総てに
再び廻り　甦る朝
目覚めの歓喜に　咲き匂う　薔薇
恵みに満ち溢れる春よ
その宝を　総てに与え　喜ばせよ
木々の梢　風に震わせ
その歌もて　この世の人を　楽しませよ
甘き香り　悩み　消え行き
欲望は　燃え
妖し力に　心　迷う
歓喜の若き日よ
空も　大地も　祝う
いざや　来たれ　此処に　歓びの春よ
歓喜の日よ　春よ
空も　大地も　祝う
戸外に　出でよ
春は　此処に　いま甦る
漲る力　他人に示せ　戸外に　出でよ
我等の持てる力　合わせ　築き上げよ
未来を　讃えよ　いざ　春を！

◇音楽と仲よしになれる、新しいカタチ、新しい音。

メロディオン

A-32

株式会社　鈴木楽器製作所
浜松市漁家町443TEL(0534)-61-2325(代表)〒430

鈴木楽器販売株式会社
横浜市緑区荏田町1856－8　横浜(045)911－1916

◆10年あれこれ◆

「オダダン」の誕生　　B1 松本和夫

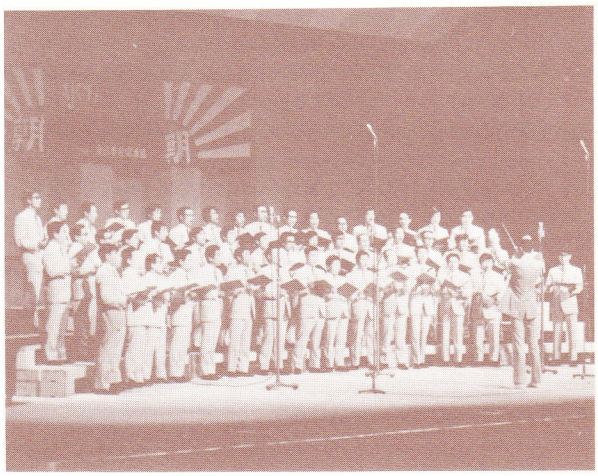
小田原で男声合唱を!!なぜ？合唱経験の多かった当時の発起人たちは、運営面で煩わしくない男の集まりを期待した面が強くあった。男声合唱ならこの人。以前から白羽の矢を当てていた「陽ちゃん先生」。当時はまったくの健康体ではなく先生の健康回復を待っていた。当初、パート４名？練習も月１回？あとは団内で（ナイショの話、やりくりが心配であった）ということで引き受けていただき、「オダダン誕生」をみたのである。(昭和４６年１１月)「半年後の５月には定演をやります」「秋にはコンクールに出ます」「練習も毎週来ます」まったく予期しない先生のやる気？。Allegro Moderatoでなく Prestissimo の感もなくはなかったが、何と、やり遂げてしまったのである。その後、事情により「オダダン」を去った者も多い。しかし、小田男（男声合唱）を忘れてはいまい。いつの日にかまたご一緒できたらとなつかしく思われる仲間が多い。

男声の魅力に憑かれて　　B1 小澤　一

何はともあれ、小田男10周年バンザイ！
私にとって小田男は心のふるさとになりました。第１回目は客席で聞かせてもらいました。男声だけのコーラス、実にすばらしいなあと、感じました。混声は大学で経験していましたが、男声合唱を直に聞くチャンスはほとんどありませんでした。誘いがあって入団して以来、早九年、最近、合唱のおもしろさ、楽しさが、ようやく分かってきました。やはり、音楽は皆で心を合わせ一体になって作り上げるものと痛感しています。それによって、自分は皆の中で生きて居るんだという実感があります。小田男のレパートリーでヨハン・シュトラウス作曲〝酒・女・歌〟という曲がありますが、この歌は、ほんとに心をくすぐるんですね。音楽のもっている不思議な力ですね。この歌の練習の後はまっすぐ家に帰る気がしないんです。浮き浮きして。
あそこに行けばあの響きが味わえる…まあこれが魅力ですね。

簡にして要を得た福永語録　　B1 足利裕之

発足第１回の練習に顔を出したものの、仕事の傍ら週１度休まず練習に出席できる目算がなく、決めかねるまま２年経っていた。ようやく入団を決めたのは、「第九」の練習に参加してこれなら通えそうだと思ってからのこと、高校以来十五年ぶりの男声合唱だが、古くからのコーラス仲間もいるから気は楽だった。第３回定演のステージでは「柳河風俗詩」と「枯木と太陽の歌」が忘れられない。「柳河」は白秋の詩もすばらしい、「枯木」の方は学生時代、早大グリーの演奏を今はない産経ホールの、谷底をのぞきこむような傾斜のきつい客席の最後部で聞いて以来、いつかはと思っていた。練習のとき、福永先生が何気なく言われることばがまことに簡にして要を得ていて、感心することしきりだった。そのいくつかは楽譜の片すみに書きとめてあるが、どれもこれも音楽作りに欠かせないことで、今読み返してもうなずくことが多い。肝に銘じておかなくてはと思っている。



第４回定演の思い出　　T2 市野修一

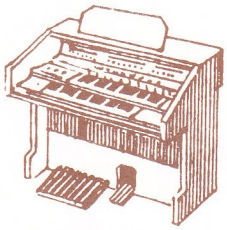
昭和５０年の第４回定演から当団に仲間入りし、現在まで何とか６年間歌って来ました。初めての出会いは前年に僕が当地へ就職して来て、第３回の定演を聴いたときでした。第１ステージからの色鮮やかなユニホームの色とグノーのミサ曲のみごとなハーモニーに唖然として見とれていました。

実はこの原稿を書く前にちょっと日本民謡の練習風景を聴いてみると、福永先生の甲高い声がまず耳に入りました。「Ｐ３つは声がしちゃいけません」なんていうのもその一つだが先生から小田男への欲求を10年も続けても相変らず続けなくてはならないのは宿命らしい。特にこの定演で歌った多田武彦の「雨」は後にレコーディングして発売したこともあり、相当厳しい練習のように思った。この頃の響きを聴いて、何とゆったりして楽に鳴っていることかと思ってしまった。そういえば、昔の青年諸先輩もだいぶ老化してきているのかな。

初のオケ伴ケルビーニ「ミサ曲」　　B2 日下部暘

★第５回定演１９７６年６月２６日㈯の夜は団最初のオケ伴演奏で、新星日本交響楽団と共にケルビーニの第２ミサ曲、福永先生編曲の旧小学唱歌１２曲メドレー〝子供の四季〟、それに狩人、巡礼、兵士の三オペラ合唱曲、アンコールは〝酒・女・歌〟の３ステージ、むし暑い小雨の夜を夢中で過ごした。
★この年の新入団で現団員はＴ１の斉藤と坂口、Ｂ１の岩崎、Ｂ２は中山と私。現休団者を加えると１０名だった。★当時団長青野正純は今も御子息？幸夫とＴ２で健在で同慶だ。
★私は故・板橋正彦に１月３日訪問され８日だかの寒い夜初練習参加した。福永先生のきめ細かな音作りにも驚歎したが、２０年余歌わなかったノドと耳の駄目さにも仰天した。音盤を聴くと今も汗が出る。★大久保昭男先生の発声で治療と回復訓練を受け、団の錚々たる技術部員や経験者の誘導・指導で今は声が出し易くなったがうまくならない。
★私は形の出来上った団に入れ幸せであった。同期の桜たちよ、戻って来い。貴様とオレとで歌おうぜ。

講師養成（特別）コース募集中



●ピアノ経験をお持ちの18歳以上の方
〈コース概要〉
第１課程　５ケ月コース←ビクトロン科講師
第２課程　１年コース→ビクトロン６級講師資格
〈理論口座〉
〈レッスン料〉
第１課程（入会金）　¥2,000

ビクトロン

井上楽器音楽教室
生徒募集
★ビクトロン科
★ピアノ科
★幼児音楽教育科
４歳児・５歳児をおもちのお母さんへ。
ピアノ・ビクトロンのための《幼児音楽教育科
お子さんに音楽を身につけさせたいとお考えのお母さん！
リトミックとソルフェージュによる音楽教育

小田原おほりばた通り井上楽器 0465(24)0515までお問合せ下さい　Victor　日本ビクター株式会社

曲と指揮者にあこがれて　　B1 二宮治二

私は第六回定演から出演したので、今回は、マラソンでいうと折り返し点から走り出したことになります。第６回は出演者が６０名を越していましたが、その後、５０名から４０数名と現在に至っているところをみると、当時は量の上からも団に一だんと活気があった頃かも知れません。

子供の頃から時々親父の長唄を聞いていたせいか、自分も定年で職場を首になったら是非やってみたいなどと思っていた所、全く思いがけないご縁で入団しました。たしか、４月に入ってすぐ５月の広島市でのジャムカには、ノコノコとお伴して行くには行ったが曲に自信がないので広島くんだりまで来て皆に迷惑をかけることもあるまいと本番では下りてしまいました。その後、あちこちの演奏会に行ったが、土地土地のうまい名物の味はおぼえていますが、曲についてはいっこう思い出しません。

曲と指揮者にあこがれて本当に歌の好きな男たちが集ったものです。

練習は多少きついことはあっても明かるく楽しい小田男がいつまでも続くようにしたいものです。

第七回定期演奏会の記　　B1 中島広志

１．時・所などのデーターは記録にゆずる。

２．出場人員。記念写真を丹念に数えてみたら５２名でありました。

３．服装。第３曲迄は例の黒服。独唱の島田祐子さんは、肩丸出しのこれ又黒い服。第４曲のミュージカル名曲集では華やかに明るく水色の服。幕が上がると場内軽いドヨメキ。島田さんは又肩ミエミエの、４階建てといった感じの、ボディを下から順に４層にとり巻く白いドレス。錦上？花を添えてとっても魅力的でありました。

４．歌の出来映え。ステージで歌っている分にはワーカリマセン。しかも筆者にとって初舞台。ライトがヤケに暑かったが多分冷ヤ汗も混っていたのでしょうな、私のＹシャツは透って濡れました。お客様の神様方は口を揃えて「よかった」と御托宣。めでたし、めでたし。

陽ちゃんの叱咤にマゾ的快感　　B1 奥津光隆

定演間近かになるといつものことだが、この野郎ばかりの仲間に入ってほんとうによかったと思う。

恒例の箱根合宿で、誰はばかることなく胸襟を開き痛飲のあした、二日酔を仙石原の大気が快く癒してくれる中で定演に向けて最後の追い込みとばかりに、音楽の仕上げに熱中する一瞬一瞬。時には、日頃のサボリが露見し、陽ちゃんの叱咤に身を固くするマゾ的快感。いやはや、こんな楽しさは団に入った者でなければ、いくら書いてもわかってはもらえまい。とにかく楽しいのだ。

君もぜひ入りたまえ。なに？楽譜が苦手だって？大丈夫、その道の専門家ならまわりにうようよいるから、いくらでも教えてもらえるし、後について歌っている間には何とかなる。入団してわずか３年目の僕が言うのだから間違いない。

そして、２度とない人生を今さら超一流の世界的合唱団でもあるまいから、せめて、歌う者も聴く者も、全身全霊で感動できる、すばらしい音楽づくりのために、君と一緒に歌い続けたいのだ。待ってるよ!!

「島よ」（第９回定演）を歌って　　B2 広田守邦

「島よ」、繊細な音の響きは、すばらしいピアノの伴奏と相俟って、詩の韻律を鮮やかに感じさせてくれた。「阿波」、昔からの、たしかな、人々の息づかいが伝わって来るようだった。つらい労働の歌とは聞いたが、そこはかとない郷愁を覚えた。「島よ」と「阿波」を、心の奥に、勝手なイメージを思い浮かべながら、心おきなく歌えて、非常に、うれしく思っている。早口言葉には往生しながらも、夢さそう、ビクトロンの伴奏に乗って、「ミッチ・ミラー」は、声が軽やかに出ないのを嘆きつつも、楽しく歌えたように思う。「ドイツ・ミサ曲語感、感受性の乏しい御仁には、とても解り得ないと思った。貧しい音楽能力で謙虚に歌うしかなかった。――、あれから１年がたった。１度はあきらめた歌を、男だけで歌える。無常のよろこびを今、かみしめている。（終）

第10回定演練習風景三題　　T2 鈴木幸三

福永先生は、何回目かのマーラーの練習日にこう言われた。「曲の難しさで言えば、マーラーの方が、多田武彦より簡単かもしれない。しかし、この２つのどちらをうまくこなすかによって、この団の性格（レベル）がわかる」と。これは、ききずてならぬ事を聞いてしまったと思いました。定演後、早速、先生にお伺いしたい件である。

雪明りの路Ⅱ「梅ちゃん」15小節以降、連続してでてくるる言葉「火をだした、火をふいて」が、「屁を―」と聞こえないかどうか心配です。――とある宴席で、どなたかがおっしゃって以来、私は、ここにくると、つい緊張してしまうのです。

サンサースは、何ヶ所か難しい所があります。定演の前のあるステージのあと、我々が泣き言を言っていると福永先生は「私も定演まで研究してみます」と発言。感動致しました。

1981年度オダダンカレンダー

２月１日　第４回市民音楽のつどい招待演奏（横須賀市民化会館）

２月21日　教育と文化の集い（小田原市民会館）

３月22日　日本男声合唱協会（ＪＡＭＣＡ）第５回演奏会（小田原市民会館）

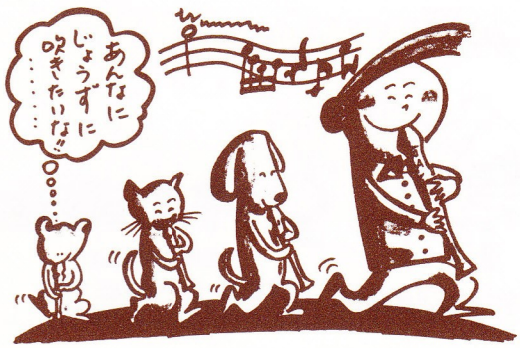
５月31日　福永陽一郎ファミリーコンサート（藤沢市民会館）

６月７日　第30回湘南合唱祭（茅ヶ崎市民文化会館）

６月27日～28日　合宿（箱根仙石原）

７月11日　第10回定期演奏会

10月　東芝レコーディング予定



AULOS ® RECORDERS

品質抜群、確かな商品

トヤマ楽器製造株式会社

本社　〒174　東京都板橋区大原町41番地　TEL. 03(960)8301(代表)

工場　〒364　埼玉県北本市宮内1262番地　TEL.0485(41)5451(代表)

〈小田原男声合唱団スタッフ〉

指揮者：福永陽一郎　**副指揮者**：松本和夫
団　長：下村興毅　**副団長・技術部長**：福井靖史　**副団長・財政部**：渡辺誠之
副団長・団員部員：市野修一　**事務局長**：井上忠彦　**事業部長**：福島修　**渉外**：斎藤恵司
情　報：足利裕之　**備　品**：日置達男　**監　査**：二宮治二・中島広志

〈メ　ン　バ　ー〉

○印はパートリーダー

	氏名	生年月日	勤務先	出身地	血液型
T1	大塚正夫	S10.11.2	大磯小	小田原	A
	吉田　晃	S11.2.29	吉田薬局	小田原	A
	坂口新治	S23.9.5	富士フィルム	岡山・賀陽町	O
	斎藤恵司	S26.3.16	桜台小	平塚	B
	○福島　修	S18.7.16	富士フィルム	金沢	O
	日置達男	S29.8.5	富士フィルム	東京世田谷	A
	杉本健二	S30.8.1	小田原市役所	南足柄	O
	小林直樹	S33.6.18	三国工業	愛知・西尾	A
	井筒　稔	S18.12.1	食品薬品安全センター	大阪	AB
	近藤国男	S20.9.23	本町小	小田原	A
	加藤治信	S14.12.3	富士ゼロックス	名古屋	A
T2	青野正純	S6.6.21	富士フィルム	東京	A
	青野幸夫	S22.4.12	秦野・西小	北海道風連町	AB
	石橋泰三	S16.9.21	二宮小	青森	O
	氏家慶明	S18.3.24	川村小	北海道帯広市	A
	○福井靖史	S17.3.29	大磯小	新潟	O
	市野修一	S24.2.5	富士フィルム	北海道函館	O
	木村敏明	S24.5.6	鶴嶺小	北海道夕張	AB
	鈴木幸三	S23.3.30	相洋中	秋田・本荘	A
	北畠道治	S26.1.22	関西ペイント	東京・大森	B
	加藤　兀	S24.7.5	高浜高	岩手・花巻	A
	藤本慎治	S24.6.9	日本インター	広島	B
	村瀬公洋	S37.1.3	東海大・学生	名古屋	
B1	岩崎敦吉	S21.4.2	本町小	東京	B
	足利裕之	S11.5.3	小嵐中	小田原	AB
	伊東清邦	S17.10.5	温泉小	東京	O
	○小沢　一	S20.1.14	昭和音短大	小田原	A
	柏木秀茂	S9.6.3	山北中	小田原	O
	松本和夫	S10.11.30	岡本中	秦野	B
	下村興毅	S15.1.15	下村商店	横浜	O
	坂上　恵	S24.9.26	富士フィルム	福岡	A
	二宮治二	T5.3.15	大磯図書館	大磯	O
	中島広志	S2.4.26	国立箱根病院	群馬・安中	B
	奥津光隆	S12.3.13	熱海市役所	真鶴	AB
B2	○阿部年男	S19.10.1	なでしこ小	高知	AB
	井上忠彦	S6.8.14	井上楽器	小田原	O
	日下部暘	S4.3.28	医師	金沢	A
	坂口宗夫	S7.2.21	富士フィルム	長野	O
	下沢　孝	S9.1.3	富士フィルム	小田原	A
	中山博之	S11.7.31	関西ペイント	大阪	AB
	羽深裕恭	S19.4.13	世界救世教	東京	A
	渡辺誠之	S9.5.23	千代中	東京	A
	栗原忠道	S13.2.3	フクスケ	横浜	B
	広田守邦	S16.1.11	マイコトキシン	東京	AB
	桑原敏雄	S11.5.20	清水医院	山梨	O
	小田切脩	S22.10.19	富士フィルム	東京	AB
	高橋　茂	S32.12.23	城北高	秋田	A
	江藤凱夫	S14.5.8	富士ゼロックス	宮崎	B

〔休団者〕（T1）長谷川幸雄・地村俊次・鈴木正昭・中島寛之・（T2）松崎正・須原清一・小坂正夫・本多行一
佐藤熹・坪井孝士・（B1）遠藤正昭・松田守弘・（B2）土居依男

〈第10回定期演奏会スタッフ〉

実行委員長：福島修
チケット・チラシ／北畠道治・藤本慎治・**プログラム**：足利裕之・鈴木幸三　**招待状**：木村敏明
演出・舞台：日置達男　**演奏技術**：福井靖史　**会計**：渡辺誠之　**合宿・会場**：市野修一
打上げ：杉本健治　**舞台監督**：福井隆　**会場責任者**：長谷川幸雄

1980～81演奏曲目

大中恩（福永陽一郎）「島よ」・三木稔「合唱による風土記・阿波」・シューベルト「ドイツ・ミサ曲」（男声版・福永陽一郎編）・ヨハン・シュトラウス「酒・女・唄」「美しく青きドナウ」・サン・サーンス・「秋の歌・冬のセレナード・春の讃歌、」ミッチ・ミラー・スタイルによるポピュラーソングブック、ロバート・ショウ編曲による小学唱歌、ベートーヴェン・交響曲第9番「合唱」（神奈川フィル定期）、ビゼー・歌劇「カルメン」（藤沢市民オペラ）、ワーグナー・歌劇「タンホイザー」大行進曲、巡礼の合唱、夕星の歌、第3幕のフィナーレ（合同演奏）

手づくりの良さと
ドイツレンナーハンマ／6角ワイヤー使用
レスターピアノ

井上楽器
小田原お堀端通り
TEL 24—0515
小田原男声合唱団事務局